
闇夜の桜

香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜の桜

【Nコード】

N0995H

【作者名】

香住

【あらすじ】

満開に咲く桜の花を、俺は今まで何の気なしに眺めていた。ふと気づくとその息吹に押しつぶされそうになる——それは単なる思いすぎし、なのだろうか。桜を見上げて涙する彼女に、その理由を問うてみたい。

01：遭遇

俺は手のラケットをくるくると回して、日陰のベンチへと進む。

「先輩、もうダウンですか？」

くすくす笑いと一緒に、ペットボトルが差し出される。それを「ありがとう」と受け取って、俺はベンチに腰を下ろす。

「ダウンってわけじゃないけど、やっぱり辛いね、昼もまだ食ってないし」

目の前のテニスコートには、まだ後輩たちがパワフルにラケットを振っている。

ふたつ下、今年二年の後輩保科が隣にちょこんと座って、肩をすくめた。

「私も。コンビニ、行きそびれちゃって」

「んじゃ行くか？ たまには奢ってやるよ」

「本当？ んじゃ一番高いお弁当にしようっと！」

無邪気に笑う彼女と一緒にコートを出、コンビニの方向へと向かう。

このテニスコートのある公園はいまや桜が満開で——花見に来ている近所の家族連れやら学生らしい団体があちこちでシートを引いていた。

まあ俺たちも例外じゃない。昼間はテニスコートを借りて、夜は花見と称した宴会の予定だった。

「綺麗ですよ。今日はちょうど見頃」

「まあ。運が良かったってことだ」

保科が嬉しそうに上を見上げて言うのに、頷いて同様に見上げる。

『女の子速度』で歩く俺たちの向かい側から、紺の制服を来た近所のOLたちがゆっくり歩いてくる。すれ違いざま、ひとりの長い髪が風に揺れて一瞬どきりとしてちらっと眼をやったのを、保科は

見逃さない。

「あー先輩、今あの人のこと、見てたー！」

「え、いや、違うって」

「ふうん、ああいう感じの人が好みなんですか？」

「からかうような保科の口調に、俺は正直赤面して——いや別に、好みってわけじゃない。ただそういう話題が苦手なだけで——ちよつと口籠もる。」

保科が振り返ってその後姿をじっと見て

「可愛い系より美人系が好きなんですね」

「からかい口調の中に、ちよつと棘のある言い方。……女の子って難しい。」

ふと、目の前の歩道にせり出した桜の枝を見上げている、紺の制服姿のOLに気づいた。

満開の枝を見つめているその表情は保科みたいに嬉しそうじゃなく、どこか痛ましげに、苦しげに見えた。

「保科、置いてくぞ？」

「まだ後ろを振り返っている彼女に言うと、俺は『女の子速度』を脱して大股で歩き出す。」

「待ってくださいよ」

「という保科の声を聞きながら、俺はその痛ましげな彼女の隣をすり抜けた。」

02：酔客

花は満開、酒はまあまあ、食物は——まあ妥協するとして。多少羽目を外すのくらいはアリだろう。実際、既に酔いは回っている。結局夜になってから集まってきたメンバーが増えて、三十人近い団体に膨れ上がった俺たちは、昼間からしいていた青いシートの上でちらちらと零れる花びらと一緒に気炎を上げていた。

「先輩先輩、飲んでます〜？」

ひとつ向こうから、悪戯っぽく笑った保科が俺の手から缶を取り上げた。

「あ、もう空っぽじゃないですか〜新しいの新しいの——ハイ」

口調はしっかりしてるものの、手はゆらゆらとおぼつかない。顔には出ない性質らしく、普段の保科とあまり変わりはない。

「お前、もう酔ってんだろ？ その辺にしとけよ？」

手渡された新しい缶ビールはそのままに、保科の手からヒョイと缶を奪う。

「そんなことないですよ〜ホラホラ、まだこれから審判だってできますよ〜」

……酔っ払ってやがる。保科は俺が奪った缶はそっちのけ、新しい缶を取り出してプルトップを引いた。

「こちらこちら、止めとけて」

「あーんずるーい」

ちろりと上目遣いになった保科に俺は正直なところ、どきりとした。認めよう。そんなコトはおくびにも出さず——よかった、酒の所為で頬が赤くなっている——俺はもう一度、保科の手から缶を奪う。

「んじゃあ先輩、私の分まで飲んでくださーい」

ちよっと拗ねたように言うけれど、気分を害したわけではないら

しい。じつと、俺がいつ飲むかいつ飲むかと見つめている。

「こら酔っ払い、大人しく烏龍茶でも飲んでろよ」

「えゝゝゝ、せっかくのお花見なのにゝ……あ。お茶、切れちゃってる」

並べた缶の中にそれがなかったのを嬉しそうにそう報告し、満面の笑みで俺の手の缶を寄越せと両手を差し出した。

……これ以上飲ませられるか、こんな危ない奴に。

「わかった、俺が買ってきてやるから、待ってろ」

ポンと頭を叩くと、保科は不満そうに唇を尖らせる。

「えーだつてー、早く飲みたーい」

「うるさい、待ってろ」

それだけ言っていると、俺は空けたばかりの缶ビールを手にしたまま立ち上がった。

立ち上がると、妙に桜が近く見える。

ちらりと上に視線をやって、少しだけささくれた気持ちが治まったような気がしていた。

03：平衡

妙な盛り上がりを見せる団体からすつと離れると、急激に静かになったような気がする。すぐ傍で仲間たちが笑い声をあげているのも隔離された空間みたいだ。妙に冷静になるのは――まだ酔っていないのか？

手の缶ビールを所在なげに掴みなおす。このままコンビニには行けないから……どこかで処分するか。

キョロキョロと見回すも、ピンクの天井の下で頬を染めている奴らばかりで、なんだか落ち着かない。仕方なく、コンビニへ出る道から外れてちよつと奥まった広場に出た。

予想通り、こつちには人影もまばらだ。桜の木はそれなりにあるんだけど。

柵になっているような石に腰を下ろして、そこでふっと息をつく。ああやって騒ぐのも悪くないけど、こうしてゆっくり見上げるのもなかなかかな。

事実、さっきまで天井を飾ってたピンクの花たちからは華やかさと晴れがましさを感じていた。なんつーか……誇らしげに咲いている、っていう感じだ。でも今は、こうしてひっそりと見上げてみるとなかなか奥ゆかしく、密やかに咲いているように見える。

恥ずかしそうに頬を染める女性のようなイメージをそれに抱いて、俺はひとりドギマギして缶ビールを口に運んだ。苦いだけだ、と思っていたのも、今じゃうまいと思うようになってる。

人間、そんな簡単には変わらないはずなんだが……俺なんか特に、どんどん周りから置いてかれてるような気もしないでもない。そこそこの大学に入って上京して、適当に勉強してバイトしてサークルで遊んで……典型的に過ごしてきたとも言えるだろう。今じ

やそこそこの企業の内定ももらって、しばらくは遊んで過ごせる。

そう考えても、俺の気分はあまり晴れない。置いていかれている、という具体的事実はありません。筈なのに、何を焦っているんだろう。そりゃ、今彼女はいないけれど――半年前にフラレはしたけど、それなりに楽しんだとも思ってるし。

弱気な思いを抱いて桜の天井を見上げると、今度は彼女が大きく存在誇示をしているような錯覚に囚われた。

一瞬、それを息苦しい、と思ってしまうた自分に驚いた。

04：落下

実際、体が揺れたのかもしれない。手にしていたビールの缶が鈍い音を立てて地面に転がり、しゅわしゅわと白い泡を吹く。

弾かれたように現実感を取り戻した俺は、それでもまだぼんやりと転がった銀色の缶を見ていた。

「落としたの？」

その声は、妙に静かに俺の中に入ってきた。ほとんど人気がない、気配さえしなかったのに突然そう声をかけられても不思議じゃない声音。不思議に心が揺れながら、俺は声の主へ視線を投げる。

まっすぐ俺を見ていた。にこりもしない表情で。黒いビー玉みたいな眼は、まっすぐ俺の中に入ってくる。

二度、ゆっくり瞬きしてから彼女は視線を伏せる。いや、そうじやなくて転がった缶を見たんだ、とわかるまで数秒。

——俺、酔っているのか？

何でだかわからないけど…妙に気分がゆらゆらと揺れてるような気がする。俯いた頭がゆっくり戻り、彼女はまたまっすぐ俺を見た。口角を上げずに、やはり真顔で。

「落としたの？」

同じ科白を口にする。落とした——？ ああ、缶か。缶、俺、落としたのか？

言われた科白がぐるぐると回った。まるで酔った時のように思考はぶつ切りになっている。なんだ？ 酔ったにしては早い。彼女は俺を見ている。その瞳は濡れている。

「泣いてるのか？」

唐突に俺はそう口にした。彼女の問いかけには答えず、しかもいきなりに。

彼女は一瞬瞠目したものの、表情は变えずに微かに頷いた。そして桜を見上げて、ぽつりと言った。

「とっても私、後ろめたくて——息苦しいの」

その横顔は苦痛に歪められていたはずなのに俺は、妙にどきりとした。苦痛よりも恍惚の表情に近いんじゃないか、と直感で思った。

05：微笑

「息苦しい……？」

その表情にどきりとしたあと、今度はその科白に心臓が跳ねた。

——俺がさっき感じたことと同じことを思ってる。こんな満開の桜の下で、そんなことを考える人間は二人もいるのだろうか。ただただ、桜の天井を眺めて酒を飲む程度の奴らが多いってのに。

「——そう。息苦しいの。まるで急き立てられてるみたい」

彼女はそう言つと、見上げていたピンク色の天井からゆっくり、俺に視線を戻した。俺を通り越してどこか違う方を見ているような、そんな瞳。

そこで俺は三回、どきりとする。なんていうか……別段俺のタイプだってわけじゃない。それに、眼を引くほど美人って程でもない。でも、その時の瞳の色に俺は惹き付けられる。

「変よね。桜の花は何も言わないのに——」

黙っている俺の前で、彼女は初めて笑った。苦笑、と呼ぶような自嘲気味の笑みが唇の端に一瞬、刻まれる。

笑つと雰囲気が変わる。ついさっきまで、儚げでどこかフワリと消えてしまいそうだった彼女が、初めて生身の人間なんだと言う印象に変わった。そうだ、彼女に満面の笑みは似合わない。どこか儚げで、微かな笑みが似合う。

「そんなこと——！」

俺が言つと彼女はスイと笑みを消して、真顔で俺を見つめる。ダメだ、そんな風に見られたら、俺。

「ない……かもしれない。少なくとも。いや、俺は——」

「優しいんだ」

うまく出なかった言葉を遮って、彼女が言った。もう幻想的なイメージは消えていて、彼女はその実体を持って俺の目の前にいた。
「ありがと」

まっすぐ俺を見ながら、彼女はその瞳からぽろりと涙を一粒、零した。それが四度目。

06：再来

俺の心臓を四度も跳ねさせた張本人は、そのままゆっくりと背を向けた。それがだんだんと遠ざかっているんだ、とわかったときには、もう彼女の背は手が届かないほどに遠く。

「——あの！」

気の利いた科白なんて言えやしない。口ばかりパクパクしてる状態だ。金魚みたいに。俺の声が聞こえたのか聞こえないのか彼女の足取りは変わらず、ゆっくりと遠ざかっていく。

「俺——俺、あんたの気持ち、多分わかる」

どもりつつそう叫んだ俺の言葉に、やっと彼女の足が止まる。その背中に、重ねて言った。

「桜……綺麗だけど、息苦しい。なんつーか、あの……うまく言えないけど、圧迫されるようなそんな感じで——」

支離滅裂だ、と自分でもわかるその言葉の途中で、彼女が振り返った。瞳はやっぱりまっすぐ俺を見てる。驚いたように見開かれた瞳。それに刺されたように、俺はふいに言葉を止めた。

——いきなり初対面で俺、馬鹿なこと言ってるよな。

そんな常識的なことが思い浮かぶようになったのは今になってからだ。知らない人と交わす会話としては随分シニールな……知らない人？

まっすぐ俺を見ているその瞳を再度見つめ返す。どこかで——そうだ、昼に桜を見上げていた……！

「あんた……昼もこれを見上げてた……」

ぽつり、と俺はそう言っていた。そうだ、昼に見た〇！。長い髪が揺れてどきりとしたとき、あの時やっぱり切なそうに桜を見上げ

てたのが、あれがそうだ、彼女だ。やっぱり苦しげだった。今みたいにどこか追い詰められたみたいだ。

それがわかると、俺の中で何か箍が外されたような気がする。まだ驚いた瞳で俺を見つめている彼女に、ゆっくりと言う。

「桜の花が、好きじゃないのか？」

瞠目していた彼女の瞳から力が抜けて、一瞬迷い、そしてずっと眼を伏せた。

「わからない。好きだけど、苦しいわ」

俺と同じだ。綺麗だと思う。確かに。華やかで綺麗だけど、どこか、どこか苦しい。——そういえば、昔好きだった女に対する感情に良く似ているかも、と俺は、思った。

彼女との距離が遠い。

07：誘引

眼を伏せた彼女は、そのまま動作を止めた。俺は——理由はわからないけれど、ただ思うままに行動していた。数歩、彼女に近づいて——そつと、抱き寄せていた。

何故、と問われると答えられない。ただ、そうしたかったから。彼女は俺の腕の中で、眼を伏せたままだった。——振り解きも、せず。

遠くから、聞き慣れた声が微かに聞こえてくる。俺を現実引き戻す声。まだ痺れたような感覚が残る腕を無理矢理彼女から引き剥がすと、俺は彼女に言った。

「明日、またここに居る」

喉の奥が掠れたように、うまく声が出なかったけれど確実に伝わったはずだった。でも、彼女はずっと眼を伏せたままだった。さつきからずっと。俺のその言葉にも何も答えず、頷きさえもしなかった。顔を上げさえも。

現実はどうどん近づいて来、俺は彼女をそのままにしておくことに酷く後ろ髪を引かれながらも彼女を背にして早足で歩く。落ちた缶ビールを過ぎて広間を抜けて通りに出ると、案の定声の主がすぐ傍に来ていた。

「先輩——！どこまで買物に行ってるんですか、迷子になったかと思っただけ」

多少ふらつきつつ、保科は俺を見てほっとした表情をする。ほっとしたのは俺がいたからであって……多分その辺の酔っ払いにでも声をかけられたか何かしたのだろう、小走りに駆け寄ってくると一度だけ後ろを不安そうな眼で振り返った。

「お前、飲み過ぎだぞ。フラついてる」

ゆらりと保科の体が揺れるのを、俺は腕を掴んで留まらせる。その反動のせいか、保科の体がぐらりと俺の胸の中に倒れこんだ。

偶然とはいえ抱きとめるような格好になって、俺はどきりとする。

——彼女を、思い出したからだ。さっきまで抱き寄せていた不思議な感覚が一瞬蘇り、俺は気が遠くなるような眩暈を覚える。

08：霧雨

雨の所為で、サークルは中止だった。これくらい静かな降りならば強行することもできるけれど……それほど熱心な奴がいるとは思えない。

大学の学食はがらんと広がった。講義中のせいもあるだろうけれど外の薄暗さにあわせての演出みたいで、俺はぼつんと椅子に腰掛けたまま窓の向こうを眺めていた。

昨夜、あのまま保科にコンビ二へ拉致されて……抜け出してまたあの場所に行ったけれどもう彼女の姿はなかった。——想像はしてたけど。

明日、と俺は言っただけで、彼女は答えなかった。……聞こえてた……よな？ でもこの雨。彼女が来るかどうかわからない。

ぼんやりと頬杖をついてそんなことを考えていると、ふいに俺は気がついた。今日彼女が来たとして。いや、来ない可能性のほうが高いんだけど。——俺、どうするつもりなんだろう。初対面ですぐに話も——そうだ、お互いの名前も歳さえも知らない。しかもいきなり抱きしめた男に言われてのこのことまた来るもんだろうか？ いや、それより俺は彼女を今日呼び出してどうするつもりだったんだ？ 会ったばかりの相手にいきなり惚れるわけもないだろうし——そうだな、普通そんな呼び出しに応じるはずがない。

——っておい、なんでがっかりしてるんだ。別に彼女は俺の好みじゃないし、そういう眼で見てたわけでもない。

ぐるぐると考え出すときりがないとはいふことだ。結局ガラス窓の向こうでひそやかに濡れていく雨の景色を眺めながら俺がわかつ

たことは。

——彼女が来ることは多分ないだろう、という可能性。でも多分、俺は行くんだろう。そして同じ場所であつんと彼女を待つのだろう。ここにひとりでいるのと、それは大して変わらない気がしていた。

09：重力

コンビニで買ったビニール傘を差して、俺は昨日の場所に居た。さすがにこの雨の中花見をしようという奴らは居ないらしく、昨夜はあちこちに敷かれていたブルーシートは見当たらない。

そっぴい、なんであのシートって青いんだろうか。白くてもいいのにな。黒でも、茶色でも。そんな落ち着いた色のほうがしっくりくるのに、何だか異質な感じがする。

桜の花は雨に濡れてはいるものの、まだ散ってはいない。多少重たそうに首をもたげてはいるが、雨粒がぼつりと落ちればまた空を向いている。

不思議な感じだった。人気のない公園で俺はぼつりと佇み、ピンク色の靄を見ていた。桜の花は昨夜よりも煙った感じの色に見え、ぼんやりと灰色の空に浮かんでいるようだった。ピンク色だけがこの世のものではないように見える。

時々、遠く足音が聞こえると俺は都度都度振り返ってその主を確かめていた。――彼女は、来ない。

いや、もし来たとして――どうするつもりだ？ 何を話す？ 改めて彼女を目の前にしたとき、俺はどんな言葉をかけてやれるのだろう。

桜の花は昨夜よりも俺を圧迫してこない。雨水に打たれたそれは今、濡れそぼるだけで息苦しい印象はしなかった。それが桜の所為なのか雨の所為なのか、もしくはただ単に俺の中の何かが変わってしまったのかは――わからない。彼女が今日の桜をどう見るのかも、俺にはわからないだろう。

どのくらい時間が過ぎたかわからない。十数分なのか、数時間なのか。時計を見る気も起きなくて、俺はただそこに立っていた。何人めかの足音が聞こえたが、習慣になりかけた動作で俺は振り返る。

10：黙認

「……どうして、また泣いてる？」

振り返った先のその姿に驚いて一瞬声が詰まり、それから俺は言った。

傘を持っていないせいなのか、髪がしっとりと濡れている。しかし、瞳は溢れる涙をぼろりと零した。彼女は少しの間呆けていたけれど——ゆっくりと頭を振る。それから桜の天井を見上げた。

細かな雨粒が溜まって、水滴になる。重そうに桜の花はその粒を抱えて抱えて抱えて——抱えきれなくなった時に、ぼろりとそれを取りこぼす。まるで、さっきの彼女の泣きたいだ。

涙を一粒零した彼女は、何も言わずに見上げている。その横顔を見つめているうち、はっと思い当たって俺は歩み寄り、薄汚れた透明な傘を差しかけた。

彼女はその視界に急に入ってきた異質物に驚いたように瞬きを繰り返して、そして俺を見る。

「ありがと」

瞳はまだ濡れていたけれど、涙は半分乾いていた。視線をもう一度、今度は灰色越しのピンクに投げやると、ぼつりと言った。

「居ると思わなかった」

「……俺も」

「そう？」

「ああ。来ると思わなかった」

彼女との会話にしては至極一般的でスムーズな会話だった。俺にしてみればそっちの方がなんだか違和感がある。彼女は可笑しそうにくすりと笑う。

「なんか、変」

「……だな」

「そう思う？」

「ああ」

「変な人」

「……」

「ありがとう」

「何が？」

ぼつぼつと続いた会話が、急にそこで途切れた。ちらりと彼女に目をやるけれど、視線は合わなかった。

「わかる、って言ってくれて。嘘でも、嬉しかった」

彼女の口元は微笑んでいた。視線はピンクの天井。そしてそれを見つめる瞳からは——涙がもう一粒、零れた。

嘘じゃなかった、という科白がどうしても出てこなかった。どうしてだかわからない。彼女がそれを望んでいると俺は感じ取ったのに——言えなかった。

黙っていることで俺は、彼女の言葉を肯定したと同じだった。

11：吐露

しばらく言葉を搜したけれど……焦る時はなかなか正しい言葉が見つからない。彼女はそんな俺を涙を零したまま、見つめてた。

「……ごめん」

俺がやっと言えたのはそんな科白でだったけれど、彼女は微かにふるふると首を横に振った。

「いいの。ありがとう」

「いや、そうじゃなくて」

今言わなければ、と俺は何故だか焦った気持ちだった。今俺が感じてることを今彼女に伝えないと。そうしないと何かが逃げていつてしまいそうだった。

「俺、わかるよ。あんたの気持ち」

慌てて言う俺の言葉に、彼女が何か言おうとするのを俺は手で押しとどめた。

「嘘じゃない。あんたに気を遣ってるわけでもない。——だってそうだろ？俺があんたに気を遣う必要なんてないわけで」

彼女との会話の中で最も長いセンテンスだったような気がする。そしてそれは妙に彼女には不釣合いだった。

「そうね」

ぽつりと彼女は言った。そしてゆっくり視線を逸らすと、鉛色の空の下で揺れるピンクを見つめる。

「その通りだわ」

その口調がどこか淋しげで、一瞬俺は怯み、次の言葉をつい、飲み込む。

でも。伝えたい。理由はわからないけど今、俺は彼女に俺が本当に感じた気持ちを伝えなくちゃならないような、そんな気がしてい

る。

「わかる、つつーのもオコガマシイかもしれないけど。あの夜、俺、多分あんたと同じ気持ちだった。夜に桜、見上げ——え？」

ああ、なんでうまく言えないんだ、俺。こんなんじや何も伝わらない。

もどかしく言う俺の言葉を途中で止めさせたのは……彼女の細い手、だった。くるとその身体が俺のほうを向いて、傘を差しかけてた俺の右手にふとその手が触れる。その感覚に俺はそこへ視線を止めて言葉を切った。

12：彼女

「どうかしたんですか？ 先輩」

午後の休講枠を学食でぼんやり過ごしていた俺の視界に突如、保科の顔が結構な至近距離に現れた。

「なっ、なんだよ、驚かせんな」

くすりと微笑むと、保科は向かいの椅子に腰掛けながら再度同じことを訊ねた。

「目、どうしたんですか？ すっごいクマ。人相悪いヒトみたい」

保科の指がスイッと俺の顔に近づく。一瞬どきりとして、身を引いた。

「眠れなかったんですか？」

「ン……ああ、まあな」

「へーえ、先輩でもそんなとき、あるんだ」

「うるさい」

保科は肩を竦めてひとしきり笑うと、ちらっと俺を横目で見ろ。

「もしかして、カノジョと喧嘩、とか？」

保科の使った『カノジョ』の意味は恐らく違うのだろうけれど。

俺が彼女を呼ぶときの代名詞と同じ言葉を聞いて、一瞬、詰まった。その間を見逃さず、保科が被せるように言う。

「あ、凶星でした？ へえ、そうなんだ……」

きやはは、と高い声で笑いながら保科がふつと表情を曇らせたのに――俺は気づかない振りをした。そして何にもなかったように話を続ける。

「馬鹿、そんなんじゃないよ。ってか、喧嘩する相手がないからな」

「えゝ？ なんだか嘘っぽいなゝ」

顎に左手を添えるその仕草を俺は何の気なしに見ていて……そし

て妙に保科の唇に目を奪われる。

どういっつもりだったんだろっ、いきなり……あんな。

咄嗟のことに俺が反応に迷っていると、彼女はゆっくり身体を離して、それから俺なんかそこに存在しない人間のようにくるりと背を向けて行ってしまった。雨は霧雨に近く彼女の髪を濡らしていた。

からかわれたのか？ どう反応すればよかったんだろっ。抱きしめても、良かったんだろっか。

「先輩？ 今日ハサークル、来ます？」

「え……うん、ああ、多分」

「じゃ、あとで！」

妙に上機嫌に笑いながら、保科が席を立つてバイバイと手を振るのに片手を挙げて応えつつ、俺の思考はまたあの雨の中に戻る。

13：無言

俺は結局、保科に嘘をついたことになった——そのまま夕方まで学食で過ごした後、あの公園へと行ったからだ。多少罪悪感がないわけでもないが、何かを約束したわけじゃないし……いいか。

夕刻、太陽がオレンジ色に空を染め、そのときばかりはピンクの天井はオレンジに染まる。仕事帰りらしい人の足音がするたび、俺は振り返る。完全に彼女を探していた。探してどうするのか、俺にもわからない。それでもただ、もう一度会いたかった。会って何を話せるのかわからない。俺と彼女の間に何かがあったかなんてこともわからない。

けれど、彼女の姿は見つからなかった。

それから三日続けて公園に通い、そして三日とも彼女の姿に掠ることさえなく俺はそれきり、公園へ行くのを止めた。

「あ……」

久々に顔を出したサークルで、真っ先に俺に気付いたのは保科だった。小脇にラケットを挟んでボールの入った籠を抱えた保科が俺を見て一瞬声を詰まらせ、そして上目遣いに睨む。

「先輩、こないだ来るって言ったのに」

拗ねたようにも見えるその仕草に苦笑して、ぽんと頭に触れる。「悪い、いろいろあってな」

いつもならその程度で済む筈が、保科は黙ったままだ。覗き込むようにしてその顔を見ると、ふいっと逸らされた。

「なんだよ、どうした？」

返事はない。それどころか、ずんずん足を速めていく。大股でそ

れに追いつきながら、俺はどうしたものかと思案する。まさか、そんなに怒ってるとは思わなかった。……なにかあったのか？

「保科？」

再度、覗き込むようにすると保科は無理に身体を捻ってそれを避け、そしてその拍子に腕が緩んでラケットが落ちかける。

「あ」

それを拾おうとして伸ばした手の所為で抱えていた籠が揺れてバランスを崩して落ちる。黄色いボールがゴロゴロと広がった。

「あーあ、お前、何やってるんだよ。ほら、手伝ってやるからはや
く――」

足元に転がった二個を掴んで差し出した手が保科に払われて、俺は途中で言葉を飲み込んだ。

何故だか目に涙を溜めた保科が、しゃがんだ俺を見下ろしている。それに眼を奪われて二の句が告げない俺の前で、保科は何も言わずくるりと背を向けて更衣室の方へ駆けていった。

14：偶然

あれきり、保科の姿を見かけていない。後輩の女の子に聞くと、講義はちゃんと出てきているらしい。

でも『忙しい』と言ってサークルには顔を出してないとか。

——やっぱり俺のせい、だよな。何でかはわからないけど。そんなに……行ってくて言っというて行かなかったのがまずかったのか？

憂鬱な気分では俺は学食にいた。次の講義はなんとなく出る気がしなくて、自主的休講だ。ぼんやりと外を見ているうちに思い浮かぶのはやっぱり、彼女のことだ。

桜はそろそろ散り始める。苦しい、と言いつつピンクの天井を見に来る彼女はその散り様をどんな顔で見るのだろうか。

「あ」

そんな声で我に返った俺がと視線を動かすとその先に――

「保科……？」

はっとしたように踵を返す保科の右手を、俺は立ち上がって咄嗟に掴んでいた。

「保科」

もう一度呼ぶと、保科は諦めたように足を止め、俺に背を向けたままボソリと呟く。

「……先輩、この時間講義、あるでしょ？」

「え？……ああ、サボリ」

そう答えながらも、なんでそんなことを保科が知っているのかにちよつと眉根を寄せる。

「お前も、休講？」

訊ねるが、何の反応もない。俺はゆっくり手首を離すと、「座れよ」と傍のテーブルを示す。が、保科は鞆を抱きしめるようにしたまま動かない。

「おい、座れよ。話があるんだ」

背中に向かってそう言っていると、俺は先に椅子にかけた。

「保科」

再度呼ぶと、今度は反応があった——ゆっくり、頭を左右に振ったのだ。

「休講、なんだろ？ 急ぐ用事があるのか？」

「……」

「それとも、俺と話するのが嫌なら——それならしょうがないよな」
ふう、と溜息をつく。何がなんだか、俺にはさっぱりわからない。

「どうしたんだよ、お前、こないだから変だぞ？」

とにかく。俺が何かしたのかどうか——それを聞いておかないとな。

「俺、なにかしたか？」

返事はない。頑なにそのままの体勢で、じっとしていた。

仕方ないか。

「……まあ、いいけどな。お前にもいろいろあるんだろうし。——たまにはサークル顔出せよ。俺でよければ聞いてやるし、な？」

いつもどおり明るい声でそう言っていると、俺は椅子を立て保科の肩にぼん、と手を置いて「じゃな」とだけ告げると学食を出た。どこ、というアテはなかったけれど、あのまま居られるはずもなく。

15：曇天

重苦しい気分ではそのままだを出る。どうせ休講だったし……それでも、真っ直ぐ家に帰る気にもならない。

……保科、どうしたんだろうか。口も利かないなんてあいつらしくない。俺本当、なんかしたのか？

考えても答えは思いつかず、何度めかの溜息で俺の視線は足元に落ちる。そこへふと、風に飛ばされた落ち葉が絡む。いや、落ち葉じゃないな。色が――

ピンクの天井が一瞬瞼に蘇る。そして、彼女のこと。

名前も知らなかった。でも彼女があの一瞬間何を考えているかだけはわかった。いや、逆説的に言えば俺はそれしか彼女のことを知らない。そして彼女が何故、あの桃色の天井にそんなに罪悪感を抱くのか、その理由さえもはつきりとはわからない。

俺も同じ思いを感じるからだ、と今更ながらに気付く。

靴に触れたそれはまた風に嘗められて、さつとその姿をくらませた。まるで彼女みたいだと苦笑して、そしてふと、思いつく。

公園の中、あまり人通りのない一角。俺が缶ビールを落としたところだ。彼女がいるかどうかはわからない。でも、なんとなく胸が騒いだ。

風がさあつと撫でていつて、そして俺の視界はピンクの水玉模様のようになる。はらはらと泣いているようなその仕草に、俺は足を速めた。

まるで彼女のようだ、と思った。風が凧ぐといつものように力いっぱいその生を誇示していたけれど、揺さぶられて涙する様は彼女のようだった。

その涙の中に、彼女がいた。真っ直ぐに天井を見上げ、そしてその瞳を見開いたまま桃色を見つめていた。彼女の頬にぼろりと零れる涙は、天井の色を映してこれもまたピンク色に見えた。

16：理由

声をかけるタイミングを完全に逸して、俺はそのまま彼女を見ていた。

「…………ごめん、ね」

唐突に、彼女がそう呟くのが聞こえた。あのピンクの天井に憶えた息苦しさを申し訳ないと謝るのなら——俺もそれは同罪だろう。少なくとも彼女と同じように、どこか後ろめたかった。

彼女がゆっくりと手を伸ばす動作を見せ、その両手に花びらを受けるように上に向ける。いくつかの桜の涙が風に乗って彼女のてのひらに納まったのが見える。

そつとてのひらを閉じ、大事なものを包み込むようにそこへ視線を落としている彼女の瞳からまた、ぽつりと涙が落ちた。

「なんで、泣いてる？」

喉からこみ上げるようにその言葉は漏れた。いきなりかけた声に彼女は驚いた様子もなく…………まさか、気付いていたのか？ 俺のこ

とを。
ゆっくりと俺を見て、そして笑った。

笑った、と思う、たぶん。本当に微かだったけれど、彼女の唇が笑みのかたちに動くのを俺は見た気がした。そしててのひらは大事そうに、彼女の胸に押し当てられていて。

「涙、みたいだよね」

彼女は笑んだままでそう言った。桃色の天井を見上げると、本当にそれが彼女の零した涙のように思えて俺は一瞬、眼を細める。

「そうだな。泣いてるみたいだ」

ピンク色の天井に彼女を重ね合わせ、俺は妙に優しい気分になっているのに気付いていた。それは桜の花のせいじゃないことも。彼女を、いとおしく思っているんだということも。

理屈じゃなかった。ただ彼女の傍にいたいと思うことに、他に何が必要なのだろう？

何故か、困ったように眼を伏せた彼女に視線を戻す。恋愛感情と名前を付けるのさえもはばかれるような淡い淡い、柔らかい思い。物思いに耽るように眼を伏せている彼女を見つめて、そこへまだ零れ落ちるピンク色の涙さえをもいとおしく感じながら、そっと、言った。

「あんたも、泣いてる。桜と同じように……泣いてる」

彼女に笑って欲しかった。哀しげに桜を見上げるのではなくて。もし俺に何が出来ることがあるのなら。彼女のために出来ることがあるのなら。

「なんで？　なんで、泣く？」

彼女の視線が俺を捉える。まだ涙を湛えて揺れる瞳に、桃色が映る。胸に押し当てられた手がゆっくりと解け、まるで心の涙のように花びらがはらりと舞った。

17：崩壊

彼女から眼を逸らさずにたつぷり数十秒。先に口を開いたのは彼女だった。

「……理由、要るかな」

淋しげなその響きに、俺はすぐに反応できなかった。

「うん。言わなきゃ、いけないかな。言葉にしたら——」

切ない声が続いた。彼女は微かに頭を左右に振って眼を伏せる。

言わなくていい。君はもう何も言わなくていい。そう、言ってしまいそうだった。俺は彼女にそれ以上、そんな切ない顔を、痛々しい涙を覚えさせたくなかった。喉に込み上げるそんな思いが堰を切りそうになる一瞬前、彼女がくつと視線を上げた。

真っ直ぐな視線。切なさも淋しさも振り切ったような、俺がいつもこの桃色の天井の下で見ていた彼女の顔。

「何か——崩れてしまいそうな気がする」

心臓を鷲掴みにされたような気がした。その動揺を表に出さないようにするのが精一杯だった。ただそれ以上黙っていられなくて、ゆっくりと唇を開く。

「崩したく……ないのか？」

もしかしたらそれは、崩しかけた一角なのかもしれない。そこに踏み込むことが良かったのかどうかわからない。けれど一歩、踏み込んでしまったことは確かだった。

彼女はふつと息をついて肩を落とす。それがどこか一線を引かれたような淋しさを感じさせる。

「崩したく……ないのかも」

「怖いのか？」

彼女の言葉に被せるように聞き返したのは、そんな不安の所為だろう。言ってしまったから少し、その詰問口調を後悔した。

違う。怖いのは俺だった。その不安を彼女にぶつけている。それを謝ろうかと口を開こうとして、気付いた。彼女の表情が涙の一步手前にいるような、そんな哀しげな光を宿していたことを。

「あなたは……怖くない？」

質問に質問で返す彼女の痛ましげなその視線に、俺は酷く自己嫌悪を感じる。怖くないわけがない。怖いからそんな質問をぶつけてしまうんだ。

「俺も、怖いよ。怖い。だけど」

つい、感情的に言葉が溢れた。理性のブレーキはもう、効かなかった。彼女はゆっくりと俺を見返してくる。涙がまだ乾いていない瞳。

「だけど俺はあんたに、泣いてほしくない、から」

そしてまた何処かの一角を大きく崩してしまったのだろう。けれど後悔は、しなかった。

18：抱擁

彼女は眼を見開いて、ぴたりとその動作を止めた。それから瞬きを一回。肩が大きく上下した。

「ありが——」

言葉を遮って俺は彼女を抱きしめた。胸にうずもれるように声が消える。腕や顎や胸に彼女の暖かさが伝わる。微かに震えながら、それでも彼女はそのままだった。

感情にうまく名前なんかつけられない。俺が今彼女に抱いている気持ちがあるのかなんてわからない。ただ俺は彼女に泣いて欲しくなくて、ただそれを支えることが出来ればと願って。

そんなことを考えながら俺は彼女を抱きしめていた。微かな震えはだんだんと落ち着いて、肩も規則正しく上下する。

しかしよくよく考えれば、いきなり抱きしめてしまったことが彼女の意に沿わなかったら、と思う。そりゃあ、事前に『抱きしめていいか』なんて聞くのもおかしい話だけれど。

「……ごめ——」

謝ろうとした声は喉に引っかかって妙に掠れる。同時に緩めた腕を彼女から離すと、温もりが失われて少しだけ冷たい空気が間を走る。

「待つて、このままで居て」

俺の声に彼女が被せるように、少し焦ったように言うと、離れかけた腕を彼女の手が掴む。そして——彼女が俺の背中にその手を、回した。

一瞬どきりとした。彼女にもそれはわかっただろう。俺はまたゆっくりと彼女の背に腕を戻し、力を込める。

愛しかった。そのときの俺の彼女に対する正直な感情はそれだ。さつきとは微妙に異なるその感情は俺の抑制の幅を超え、左手をゆっくりとその背に沿わせて指先や手のひらから彼女を感じる。

俺の胸に、彼女が頬を押し付けてまるで誘うような仕草を見せる。けれど――それとは裏腹に、触れている背中では強張った。一瞬で温もりは冷たくなる。俯いて彼女の表情を探るが、胸に埋めるように押し付けてきて、どんな表情をしているのかわからない。でも、伏せられている彼女の顔。見えないけれど感じるのはイエスじゃなかった。少なくとも、積極的なものではなくて。

今にもまた震えだしそうな肩を見ているうちに、俺の中の制御が働き始め、くすつと笑うともう一度、彼女の背中を抱いた。

「大丈夫。大丈夫だから――震えなくていい」

軽く背中を叩いてそう言うと、俺は温もりの確かさをもう一度かみしめる。彼女を守りたいというのはまだ、俺の正直な思いだった。

19：衝動

どのくらい——経っただろう。

俺は彼女を抱きしめたまま、時々零れる桃色の涙の中に居た。さあつと風に揺らいで、俺と彼女の周囲をふわふわと舞っていく。

ふと、彼女がぐいと俺の胸を押す。顔は上げないまま、ちいさく「ありがと」と囁く。そしてそのまま——くるりと背中を向ける。

「ちょ……！」

慌てて手を伸ばすと、ギリギリ彼女の手首を捕まえた。しかし顔は背けたままだ。

「……どした？」

「なんでもないの」

小声だったけれど早口に彼女は俺の質問を打ち切る。

「……なんでもなくない、よな？」

「……………」

「どうした？」

ふるふる、と頭を振るだけでその表情が見えない。わからない。掴んだ手首に力を込めて引き寄せると抵抗はするものの、ずるずると引き摺られてくる。もう片方の手も掴むけれど、彼女は頑なに顔を伏せている。

それ以上何か言える筈もなく、俺は彼女の名前を呼ぼうとして気付いた。名前すら知らない。こんな時、なんて声をかけていいのか。なんて呼べばいいんだろう。

「顔、上げる、よ」

動かない。

「顔、見せて」

そこで微かに頭が左右に揺れ、頬の一部がちらりと見えた。

——泣いている。

それを見た瞬間、今までになく心臓が跳ねた。どきりとして緊張してそれから——片手を放すと彼女の顎に手をかけて強引に顔を上げさせる。涙に濡れているのを再確認した後、俺はそのまま強引にキスをした。

一瞬の間の後彼女は嫌がるように頭を引くけれど、俺は構わずそのまま抱きしめて、唇を放さなかった。肩から力が抜けたのを感じ、それに伴って俺が腕の力を緩めたところへ、彼女が力いっぱい俺を振り切った。

泣いていた。彼女は数歩後ずさりしてなにか言おうと口を開きかけ……そのまま踵を返していく。追うことも、声をかけることも出ずに俺は彼女を抱きしめたかたちのままの腕を見下ろす。

俺——彼女が好きだ。守ってやりたい。泣かせたくない。彼女に、触れたい。抱きしめてキスをしてそれからもつと——

自分の感情の振幅にそこで初めて気付き、ぎゅつと拳を握り締めることでどうにかその衝動を押さえ込もうとする。

桜の涙の向こうには、もう彼女の後姿さえも見えなかった。

20：思慕

午後にひとこまあつた講義に出るために大学へ行つたが、締め切られた教室にいるのが息苦しくて開始早々抜け出し、がらんと人気がない学食に移動して隅の椅子に腰かける。外はまだ明るく、いい天気だった。

結局あれつきりだ。彼女と、また会えるかどうかさえわからない。なんで俺、あんなこと――

「……先輩」

一瞬、誰のことかわからなかった。再度声をかけられてやっと遠い思考から戻つて視線を上げ、声の主の名前を手繰り寄せる。

「ほし、な」

「ちよつと、いいですか？ 来てもらつても」

口を利くのは久しぶりだった。保科から話し掛けてくるのはもつと久々だ。どうやら俺はひどく嫌われていたらしい、し。

「ああ……どした？」

訊いてから思い出す。そういや俺、俺でよければいつでも聞くから、とか言つたんだ。座つたまま見上げれば随分と真面目な顔をしている。多少元気がなさそうではあるが、いつもの保科だ。

「まあいいや、中庭でも行こうぜ」

場をそつ濁して椅子を立つ。保科に特に異存はないようで、学食から中庭に繋がる扉へ向かう俺のあとをついて来た。

「で？ なんだよ、どうした？」

中庭の奥のほうはあまり近くに人の気配もなく、遠くの方に談笑する数組が見えるだけだった。保科はずっと黙ったままにいる。…なにがあっただろうか。

そう言えば彼女のことにかまけて保科の様子がおかしいことに言及するのを避けていたな。まあ、向こうが俺を避けてたつてもあるんだけど。

身長差を縮めるように背をかがめて俯いた顔を覗き込む。

「保科？」

「あ……のっ！」

俺の声を打ち消すような、思い切った口調の強さに俺は正直、一瞬戸惑う。俺を見上げる保科の眼は、うつすらと涙を溜めていて。

「私……」

保科を、じゃなく。涙の向こうに俺は彼女を見ていた。桜を見上げて涙する彼女。また、あの場所にいるんだろうか？

ふと、保科の手が服の袖口に触れて現実に戻る。見上げる潤んだ眼。デジャ・ヴュのように感じるその一瞬にやっぱり思い出すのは彼女で。

駄目だ、今はちゃんと保科を見てやらなければ。思い直して彼女の幻想を振り切り、まっすぐ瞳を見つめた。

強い視線に微かに震えた声。

「私……先輩が好き、です」

21：刹那

——え？

聞こえない……わけがなかった。たつぷり一分は俺、思考が止まっただろう。

「え……と」

そんな声しか出てこない。保科は俯いて、ぎゅっと手を拳に握っていた。

「ごめん、俺、お前のことそんな風に見たことなくて、酷い科白だ。自分でもそう思う。」

「えと……ごめん」

見ただけで、保科の肩が震えてるのがわかる。そこへ手を伸ばそうとして——止めた。

「これから、そういう風に見てくれませんか？」

涙の溜まった瞳をくつと上げて、保科が声を震わせて、言う。

「これからでいいんです。今先輩にそんな気がないことわかってます。だから、これから私を見て、考えて……くれませんか？」

正直、可愛かった。そんな風に言う保科が健気にも見えた。——揺らされる。

「先輩の傍に、居たいんです」

言つと、下唇をきゅっと噛んで涙を堪えている。

「保科」

真剣な眼で見返され、俺はどぎまぎして視線を逸らす。それでも続ける。何故だか俺の声までも震えている。

「俺、やっぱお前のことそういう風には見えないよ。後輩として可愛いとは思っけど……」

保科の瞳で涙がじわり、と膨れるのがわかった。揺らされる。「でも……ごめんな」

眼から涙が零れそうだと、思った瞬間、保科は眼を伏せる。ぽたりと、地面に落ちた粒が見えた。

しばしの沈黙の後、掠れた声で保科が顔を伏せたまま、言った。

「わかり……ました」

はぁ、と息をつく。そしていつものトーンに戻そうと明るい声で続ける。

「すみませんでした、いきなり、びっくりさせちゃって」

さっと手で涙を拭って顔を上げ、恥ずかしそうに笑う。

「気に、しないでください。サークルもちゃんと行きますから。――

――じゃ、失礼します」

ぺこりと頭を下げると、そのまま踵を返していつてしまう。俺に何も、言わせずに。

……気づいてなかった、といえば嘘なんだろうな。保科には――悪いことをした。

いつの間にか深く溜息をついている。やっぱ、女の子の涙は魔物だ。

彼女の涙も……そうなのか？あの桃色の天井を見上げて溢れていた涙も？ 締め付けられるようなあの感情も？

見渡すが、キャンパスに桜の木はなかった。

22：動揺

サークルには行く、と言ってはいたが、その日もその翌日も、保科は姿を見せなかった。

……当たり前か。いくらなんでもすぐに切り替えるなんて無理がありすぎる。さりげなく後輩に聞けば講義にも姿を見せておらず、ケータイも出ないとか。

一人暮らしで体調を崩したときの辛さは俺も良く知ってる。このまま死んじゃうんじゃないかって思うときもある。迷った挙句に俺は念のため、なんて自分に言い訳をかましながらサークル名簿で保科の住所を控えた。

……行くのか？

そんな自問に答えは出ない。行くべきじゃないんだろう、ということだけはわかる。わかってる。念のため、だ。

夕方、俺はまたも念のため、と言い訳をしながらケータイのメモリを繰った。保科麻衣子。メールアドレスはそういえば聞いてなかった。

表示された携帯番号をしばらく眺め、バックライトが消えた直後に通話ボタンを押す。無粋な呼び出し音が一回、二回……と続き、七回コールし終えたところで電話を切った。

もしかしたら寝てるかもしれないし、もしかしたら俺からの電話は迷惑なのかもしれない。いや、もしかしたら電話に出られないほ

ど具合が悪くて――

嫌な想像を打ち消すように無意識に頭を振った。しかし不安は消えはしない。関わるべきじゃない、っていうのも理解はしてる。頭では。

二時間後、俺はすんなりと保科のアパートを見つけていた。きちんと区画整理された街だったのが幸いで、丁度南東の角、白いアパートの二階がそこだった。部屋には明かりがついていて、主の在宅を示している。

……どうするか。女の子の部屋にいきなり訪ねてくつても問題ありだろうな。

白いアパートを見上げて俺はもう一度ケータイを取り出し、発信履歴の一番新しい番号を表示させて通話ボタンを押す。今度は六回目で、相手が出た。

「……もしもし」

「保科？ ええと、俺、高瀬です。高瀬裕也」

「……はい」

「大丈夫か？ 大学も休んでるって聞いて、それで……」

電話の向こうは沈黙だ。どうしよう。何を言おう。何を言える？ 混乱した頭で次の科白を探す。見つからなくて焦った俺はつい、事実を口にした。

「あのさ、今、俺、保科んちの傍まで来てるんだ」

「――え？」

23：怒気

ケータイの向こうは絶句したまま、沈黙した。——そりゃ、そうだな。

「ごめん、あの、俺……」

『同情、ですか?』

嫌にはつきりとした声音で、保科が言った。一瞬その意味がわからなくて聞き返そうとした刹那、やっとなで脳味噌に意味が通る。

『私に同情しているんですか？ 失恋して、落ち込んでるから?』

冷たい印象の声は今度ははつきりと怒りの色を仄めかす。いつもの快活な笑い声とは全然違う。

「保科、あのな」

『同情なんかされたくないです。特に、先輩には』

「待てよ、落ち着い——」

『そんな風に中途半端に優しくしないでください。私だって、私だって……』

キツイ口調で一氣に言うと、最後は嗚咽に変わった。

いつも明るくて元気で、なにかというところからかった。そんな保科の反応が見たくて、可愛くて——それが恋愛感情かっていわれると正直、迷う。彼女のように強烈に惹かれるところはないにしても、保科と一緒にいるのは楽しかった。

「保科」

返事はない。気配だけが漂っている。

「ごめんな。……って、俺が言うのもおかしいんだろうけど」

送話口の向こうで、ふっと空気が緩んだような感じがした。いつもするような、苦笑。

『……そう、ですよ。先輩がそんなこと、言うの、おかしいんですからね』

泣き笑いみたいな声、強がつてるのはわかってる。そうだった。いつも生意気な口を利いて、笑って、そのくせどこか危なっかしくて。

「大丈夫か？」

『だから……先輩がそんなこと言っちゃ、駄目、なんですよ？ 私、諦められなくなっちゃうじゃないですか』

言葉の最後はまたこみ上げてきたらしい涙に包まれていた。

『何で来ちゃったんですか。何で電話なんかするんですか？ 私まだ、先輩のことが好きなんですよ？ 来てくれたりしたら、余計な期待、しちゃうじゃないですか。駄目ですよ、もう……』

保科の涙声が一気に響くといきなりツーツという電子音に変わって、俺は慌ててリダイヤルをかける。放っておけない。おける筈がない。俺の所為だったとしても、放っておきたくない。

耳には無表情なアナウンスが響く。『電波の届かないところにおられるか、電源が入っておりません』

俺は衝動的に階段を上がって、ドアチャイムを押した。三回続け

ざまに押したあと、カチャリと鍵の外れる音がした。

24：天秤

「保科」

ドアの隙間から、真っ直ぐな茶色の髪が見えた。

「保科」

ぐいと力を込めてドアを引くと、あっけなく扉は開いて転がるように俺の胸に保科がぶつかる。慌てて右手でその肩を支えながら一瞬考えて中へ入る。保科を支えたまま後ろ手にドアを閉めてから、もう一度名前を呼んだ。

「保科……？」

頭を上げず、微かに左右に振っているのがわかる。掴んだ肩は小刻みに震えていた。

ドアに背中を預けると、俺は肩を支える手でゆっくり背中を叩く。まるで子供をあやすようなそのタイミングにだんだんと保科の震えが小さくなっていく。ゆら、と保科の身体が左右にブレて、俺は慌てて両手で肩を支えた。

「大丈夫か？」

こくん、と小さく頷きが返ってくる。そして身体が俺の手から外れて前に倒れ、とん、と俺の胸に頭を押し付けて……止まった。

「しっかり、しろな？」

右手を伸ばして軽く髪に触れる。ポンポン、と撫でるように叩いてから指で髪を梳いた。

その行動で、保科が癒されているのはわかった。けれど——完全に想いに応えられない限りは保科を癒すことにはならないだろう。むしろ逆で、あとあとまた傷つけるかもしれない。梳いた髪感触が指先に残る。さらりとした髪。抱きしめてしまえる距離。

でも——でも、泣き顔を見せまいと顔を上げない保科の姿は彼女

に被る。あの時もそうだった。彼女は涙を隠していて俺は顔が見たくて強引に腕を掴んで引き寄せて――

急速に蘇った彼女との時間に、俺は数秒息を止める。彼女に対し抱いていた筈の欲望までもがありありと思い出されたからだ。

保科の肩を乱暴に離すと、大きく息をついた。驚いたように濡れた瞳で保科が俺を見上げるのからも眼を逸らす。もう一度深呼吸して、眼を閉じた。

「……先、輩……？」

「ごめん、俺、お前のこと考えてやれてなくて」

反省を込めて言った言葉に、髪が左右に揺れる。

「いいんです――もう少し、こうしててもらえませんか」

再びとん、と頭が胸に押し付けられたのが限界だった。

ぎゅっと拳を握って、それからゆっくり保科の肩を掴む。

25：欲望

掴んだ肩をぐいと押し返した。驚いたような保科の顔を見ないよう、俺が今度は頭を下げた。

——いや、保科に悪いって気持ちもあったからだ。

「ごめん。——ごめん、俺、お前のことホントに大事な後輩だっと思って。でも気持ちは……受け止めてやること、出来ない。——だけ」

「だけ、ど？」

乾いたような保科の声が頭の上から降ってくる。いつもみたいなからかうような口調じゃなくて、どこか無機質な声。

「けど、今俺、お前を抱きしめたい」

馬鹿だ。自分で言っていることが馬鹿なことだってわかってる。保科を傷つけるってこともわかってる。同情にしか過ぎないってことも重々、わかってる。

「わかってます」

数秒の沈黙のあとで、保科が零すように言った。

「先輩が私のことなんとも思っていないこと、わかってるんです……」

保科の肩を掴んでいる俺の腕に、保科の涙が落ちてくるのがわかった。声はいつもの保科のものだった。少し、涙で滲んではいたけれど。震えてはいたけれど。

「こんな風に傍に居てくれたらいいなっずっと、思っていました。先輩が私の傍にいてくれたら、って」

きゅっと下唇を噛んだ。俺は何を考えていた？ 彼女のことを保

科に重ねて見て、それで――

「先輩と笑うのが私、好きでした。ずっと傍で笑っていたかった……」

「……ごめん」

「いいんです。わかってるんです。駄目なの、わかってるんです」

保科の声が破綻する。細切れになる言葉は涙に途切れる。それから、崩れそうな泣き声で、続けた。

「抱きしめて、くれますか？　今だけ、私のことちゃんと見て、私を抱きしめてくれますか？」

強く唇を噛む。目を瞑る。彼女のことを頭を、一瞬だけ掠めた。

あのピンクの天井の下で彼女に抱いた、消えそうに微かな存在感を感じ、保科に感じる。

そんな俺は――放っておけない、なんて言い訳かもしれない。

保科の肩から背中に腕を滑らせて、身体を抱き寄せた。左腕で頭を抱き寄せると、そのまま力を込めた。その瞬間、俺は彼女じゃなくて保科を見ていたと……思う。

でも、胸に浮かんだ感情は彼女を抱きしめたときの欲情じゃ、なかった。

26：自制

ぼんやりと歩いた道は、気がつけば桜の公園へと辿っていた。勿論とつくに俺の両腕に温もりが残っている筈がない。頭の中は、保科が最後に言った言葉がぐるぐると回っていた。

抱きしめた腕の中で、保科が言った。

「もし言わなかったら、私、ずっと可愛い後輩でいられました、かな？」

俺がびっくりとしたのがわかったんだろう。保科がゆっくりとした動きで俺の腕を外す。

「好きだって言わなかったら、ずっと好きでいても、良かったのかな……」

保科はもう、泣いてはいなかった。真っ赤になった眼を、恥ずかしそうに伏せると力なく笑う。

「諦めなくても、良かったのかな」

淋しげに見えた笑顔ははらりと儚く消えた。それ以上保科は何も言わず、俺も何も言えず、そのままだった。

涙は彼女を思い出させる。赤くなった眼。頬の涙のあと。

俺は？ 俺はどうなんだろう。俺は彼女に拒まれたことで諦めなくちゃならない？ やっと気付いたのに——それと同時にこの思い、葬らなきゃいけないのか？ あんな不器用なやり方でしか彼女に伝えられなくても？ いや、もしどんなにうまく伝えることが出来たとしても、彼女が答えてくれなきゃ意味がないんだ。応えてもらえない思いを、俺は殺してかき消さなきゃいけないのか？

……それは、嫌だ。

そんな感情が俺の我侭だったこともわかってる。俺がどんなに思おうと、彼女がどう思っているか——あんな風に逃げられてどうもこうもないんだろうけど、それでも、彼女の思いがなければ意味がない。

溜息をついた反動で見上げる夜空に、桃色が見える。さわさわと夜の風になびいて、桜が泣いていた。

彼女——泣いていないだろうか。ひとりで泣いていないだろうか。大丈夫、なんて表で笑いながら泣いていないだろうか。

「なんか俺……全然駄目駄目」

考えているだけで何かが出来るわけでもない。保料のこともそうだ。何かあいつにしてやれるわけじゃない。結局、宙ぶらりんで何も出来ない。

こんなときにひょっこりと彼女に会えたなら、偶然って奇跡を信じてみたくなるのに。神様が本当にいて、俺たちを見ていてくれていんだって信じてもいいのに。

桜並木はただはらと花びらを降らせるだけで、そのどこにも、彼女の姿は見えなかった。

27：軟派

俺はそれから一週間、公園に通い詰めた。勿論講義が終わってから、だけど。

彼女は社会人だろうから、十七時を過ぎなきゃ現れないだろうってこともわかってたけどそれでも俺は通っていた。もしかしたら、とかそんな小さな期待の所為だ。

桃色の天井はすっかり枝ばかりの裸になって、時々思い出したように僅かに残った花びらが零れる。これから、桃色は緑に変わっていくんだろう。彼女は緑の天井をどんな顔で見るんだろう。息苦しい、とやっぱり眉根を寄せるんだろうか？

テニスコートはナイター用の明かりがついていて、妙に昼間よりも明るい。その脇道を歩きつつ、そういえば最初に彼女を見かけたのはここだった、と思い出をなぞるように思い出している自分に苦笑した。

つい前方不注意になった俺に長い髪の前がふわりとぶつかっただのはそのときだ。

「あ、ごめんなさい」

髪を持ち主が振り返って謝罪の言葉を口にする。「あ、いえ」と短く答えて行き過ぎようとしたとき、記憶が鮮やかに浮かんできた。

あの時、彼女と一緒に居た人だ。彼女と同じ紺色の制服を着て、俺はあの時この人の髪がなびいたのに見惚れて――

「……あのっ」

既に背を向けていたその人に声をかけると、長い髪が揺れて、振

り向く。ピンク色の唇が「なにか？」ときょとした声で訊ねた。

「あの……前にも会いました、よね」

「え……？」

俺の記憶はどんどん鮮やかになっていく。そうだ。あの時彼女はやっぱり痛ましげに桜を——そう、この木の枝を見上げていた。

「ナンパ？」

「ちっ、違いますよ！」

俺の目の前で大きな瞳を何度も瞬かせていたその人はにっこり笑って訊ねた。慌てて否定すると、軽く「なんだ、違うんだ」とにっこり笑う。きれいな人だ。

「ホントにあの、前にここ、通りましたよね？ 紺の制服で、あの、昼間に」

俺の慌てた説明にその人はきょとした顔で、頷く。

「お昼ね。会社が近いから何度かお花見に来たかな、友達と」

「あの、友達って、背のちっさい、ショートカットで、桜見上げるような……？」

俺が彼女を説明する言葉はそんな風にどこか嘘くさい。なんて言えばいいんだろう、彼女の雰囲気を表せる言葉は俺の語彙には見つからなかった。

その人は俺の説明を聞いて俺をじっと見つめ、しばらく見つめ、それから重く口を開いた。

「あなた……乃里子にキスした、人？」

28・予言

「え……」

きりつと持ち上がった眉は綺麗に弧を描いていて、ピンクの唇がきゅつと引き結ばれる。その視線の強さについて、及び腰になって眼が泳ぐ。

「やっぱり、ね。あなたどういっつもり？　乃里子のことどう思ってるわけ？」

「いや、あの……」

のりこ、というのが彼女の名前らしかった。のりこ——どんな字を書くんだろうか。

「一時の欲望の対象とか、遊びのつもりなら止めてね」

俺が頭の中で漢字をなぞっている間に、その人は早口でとんでもないことを言い出した。

「誰とでもオッケー、なんて子とは違うんだから！」

「ちょ、ちょっと待ってくださいって！　俺は別にそんなんじゃないの？」

「ないの？」

「ないです」

「欲望も、何もない？」

「……そう言う意味じゃなくなつて……」

まいった。どう言えはいんだろ。確かに俺よりこの人のほうが語彙が豊富で頭も回る。太刀打ちできるレベルじゃない。

「やっぱりあるんじゃない」

「そりゃ、ないとは言わないですよ、俺だって男だし」

「乃里子が好きなの？」

ぼん、と最後に投げられた直球ストレートな質問のあと、俺とその人の視線が合った。まっすぐ見つめられた瞳は強かったけれど、逸らせなかった。

「……好き、ですよ」

「あーそ。ならいいわ」

今の今まで、半ば睨むようにしていた表情が一瞬にしてくるりと笑顔に変わり、踵まで返して行ってしまうのを、俺は慌てて引き止めた。

「ちょ、ちょっと待ってください!」

「なアに?」

きょとした顔。

「あの、彼女……元気ですか?」

「ええ、元気よ」

「えっと……どうやったら会えますか?」

「会いに行ったら?」

「どこへ?」

「なんだか、この人が彼女の友達っていうの、わかる気がする。――妙に、意外な展開に強い人だ。」

「あ、そっか」

俺の質問に瞬きを繰り返していたその人は急ににっこり笑って頷く。

「あなた、乃里子に会いたくてここに居たの?」

「答えに詰まる俺。それは既にイエスの答えになっていて、その人はますます悪戯っぽく、笑った。」

「明日もまたここに居る？」

「……はい」

「じゃあきつと、明日会えるわ」

小さく手を振ると、その人はそのまま歩いていく。さすがにもう一度引き止めるパワーは俺に残っていないくて、その長い髪が揺れるのを見送っていた。

明日——？

29：修正

講義が終った後、まだがやつく教室を俺はすり抜ける。そのまま駆け過ぎようとしていた先にちらりと見覚えのある姿を見つけてブレーキをかける。

相手は中庭の向こうで俺を見つけて、そしてかすかに頭を下げた。短くなった髪が風に少しだけ煽られる。

「今日は来ないんですか？」

にこり、笑う。自然な口許。眼は赤くない。新しい髪型は保科の快活さによく似合っている。口紅の色が違った。わずかにピンクが強い。

「あー……うん、ちょっと野暮用でな」

笑い返せただろうか、俺は、いつも通りに。まるできちんと書かれたシナリオをなぞっているような会話が続く。

「えー、たまには顔出してくださいよー」

「しばらくズル休みしてた奴の科白か？」

「あ、いったいなあ、それ」

くすくす笑いが広がる。そして保科がほっと息をつくのがわかる。俺と保科の視線が合う。

「ありがとうございます」

一瞬だけ真顔になつて、もう一度、今度は深く頭を下げた。本当に言いたいことが俺にはそれで伝わった。もしかしたら保科は、そんなに深く考えていなかったのかもしれないけれど。

「余裕が出来たら、顔、出すから」

「ええ。楽しみにしてます」

ひらひらと小さく手を振って、保科はくると俺に背を向けて、歩き出す。その後姿を少し眩しく見送って、そしてあの公園へと急いだ。

傾きかけた陽がオレンジ色を強く放出する。それに照らされた空が僅かに染まりながらも、天頂から降り注ぐ藍色がだんだんと沈み込んでいく。

明日会える、と言ったあの人。確信を持ったその言い方を俺は頭から信用していた。何故か、の理由はわからないけれど、でも、あの人が彼女を良く知っているのなら、きっと。

俺はさすがにそこまではまだわからない。それでもただわかるのは、彼女に会えるのはここなんだ、と言うこと——それだけだった。

30：気配

夜の粒子に包まれた公園は、その薄闇を背景にピンクと緑で彩られていた。もう、随分と花は落ちてしまったらしい。歩きながらもひらひらと視界のあちこちで花びらが舞い降りる。なんだか、まるで違う木みたいに、見える。

桃色だったときはどこか窮屈に感じていた思いは、今ではもうほとんど感じない。もしも——いま残りの桃色が全部緑に置き換わったとて、あんな風に胸を締め付けられるような感じはないだろう。それが、何故なのかは俺自身にもわからないけれど。

……ああ、もしかしたら彼女ならわかるのかもしれない。もしかしたら彼女も、緑の天井には圧迫感を感じないのかもしれない。そうだな、会えたら聞いてみよう。緑の天井は息苦しくないかと。そしてイエスの答えが返ってきたら——その原因を教えてもらおう。そうすることで俺自身の疑問も解決するかもしれない。

定位置には誰もいなかった。もしかしたら彼女がもう来ているかもしれない、と思ったが腕時計はちょうど十七時を指したところで、きつとまだ仕事中的なのだろうと思う。

今週ずつと早いときで昼過ぎからここに居た俺の行動は、あとから思えばいささか馬鹿だったと……思わなくもない。

けれどここまで待てばあとのくらい待とうとも構わないか、と俺は長期戦を覚悟して、ごつごつとした幹に寄りかかる。それに今日は——あの人が予言してくれた。きつと会えるわ、と言ったあの人の笑顔を俺は信用していた。

木に頭を預けて見上げれば、緑と桃色がマールブルされた天井が眼に入る。時々ひらひらと桃色の天井の一部が力尽きて落ちてくるの

もわかる。顔の近くに舞つてくるときは思わず眼を閉じてしまったりするけれど——一枚が随分と気紛れに俺の唇にキスをして落ちていった。

花びらのキスに彼女の唇の温かさを思い出す。しかしそれは俺に欲情の記憶も蘇らせる。ふと込み上げる激情に、俺は目を閉じて耐え——もし今日、目の前に彼女が本当に姿を現したとしたら、堪えうる事が出来るだろうか、と自問する。

数十秒の間のあと、イエスの答えが無事に導き出されて、俺は安堵の溜息と一緒に眼を開けた。見上げていたままの姿勢で、耳に入ってきた砂利の音に自然に視線がゆっくりとおりていった。

31：苦渋

彼女、だった。ただそれだけが嬉しくて、ごくりと喉が鳴ったのを俺は必死に押さえ込む。

「――桜」

「え」

眼を逸らしたのは、気付かれなくなかったから。声は掠れなかっただろうか。彼女の声は細くて、小さい。

「もう、散っちゃうな」

「――うん」

俺は彼女の様子が気になっていた。どことなく、儚げに見える。まるで泣き出しそうになるのを我慢しているように。

ゆっくりと視線をおろして、見上げている横顔を見つめる。

「苦しく、ない？」

思いのほか自分の声が柔らかく聞こえた。保科を気にするのとは全然違うこんな気持ち。昨日あの人に聞かれたときはつい『好きだ』って言っちゃったけど……それはやっぱりそう、なんだろう。

「苦しく――？」

「そう。いつも、苦しそうだったから」

彼女が答える。泣きそうな表情。俺はそれが――彼女が哀しそうなのがやけに苦しくて、それだけ言つと桜の木から、離れる。

大股に彼女に歩み寄ると何も聞かず、ただいきなり彼女を抱きし

めた。

「泣くな」

それだけしか、俺には言えない。泣かないで欲しい。彼女には泣いて欲しくない。俺が何か出来るのなら——彼女が泣かないように何か出来るのならいいのに、と、切に、思う。

彼女は俺の腕の中で微動だにしない。拒まれないのいいことに、俺は腕に力を込めた。……そっちは、半分以上欲情かもしれなかった。彼女の短い髪が頬をくすぐる。

ああ、そういえば——と、俺は思い出していた。前回ここで会ったときはいきなりキスして、そして彼女が逃げたんだった。そうだ、俺、そのことすら謝らないでこんなこと。

僅かに逡巡する。それとほぼ同時に、彼女が俺の腕の中で微かに声を上げた。

「——待つ……て」

掠れたような声は酷く怯えているように聞こえて、俺はびくりと腕を振るわせる。

そうだ、当たり前だ。きちんと謝りもせずになた俺は、自分の欲情ばかりを彼女に押し付けている——胸に覚えた後悔の念が顔に出ないよう出来る限り努力して、俺は彼女を解放した。掠れてしまいいそうになる声を意識的に張って、それでも少し、震える。

「……ごめん」

「——違う」

彼女が首を振って、何かを否定した。それが何なのか——俺に下される言葉が何なのか、次の声が待ち遠しい。

32：唐突

彼女が俺を見上げる。目が合うと、自分の頬がカツと赤く染まるのを自覚した。だから……じゃいけど、彼女をまっすぐに見られず目を逸らす。

「違うの」

と、彼女の声が耳に届く。違うの——違うの。何が違うというのだろう。いや、それよりもまず俺は彼女に謝らなければいけない。今日の目的を果たさなければ。

「あのさ、俺……」

彼女の次の台詞よりも先にそう滑り込ませた。けれど目を見ることは出来ない。妙に落ち着かない気分で、俺は逸らした視線さえも泳がせていた。

彼女を見ないまま、俺は思い切って吐き出した。

「俺…… あんたに、会いたかった」

謝罪の言葉よりも願望が先に口をつくなんて俺はまるで子供みたいだと自分でも思う。けれど一度堰を切った感情は止められない。

「あんたに会いたかった。あんたを守ってやりたかった。あんたを泣かせたくなかった。だけど俺、こないだみたいなこと——」

やっとそこで、俺の理性のブレーキが効いてきた。しかし不器用にぶつりと言葉が途切れる。こないだみたいなこと——今だっただいして変わらないことをしている、と思うと舌が動かなくなる。

俺は眼を閉じて深呼吸をする。彼女がゆっくりと顔をあげたのが、

気配でわかった。

「こないだみたいなこと、いきなりすんのは、良くないと思う。ごめん。悪かった」

きちんと謝罪の言葉を紡ぐことができた俺は、思い切り頭を下げた。彼女が許してくれない可能性もある。責められたら——せめて、俺の気持ちだけでも伝えておきたい。そんな切なる願いを抱えて、俺は彼女の言葉を待った。

「ひとつ、質問と、それから、伝えたいことがあるの」

彼女の口調はいつもどおりだ。俺はゆっくりと頭をあげると彼女の視線とぶつかった。何を聞かれるのかわからないけれど、きちんと話をしたい——その思いだけで俺は彼女に対峙していた。

俺が頷くと、彼女は僅かに口角をあげる。

「——身体の方に興味がある、っていうこと？」

俺は自分の体も表情も固まったのを自覚した。じつと彼女を見つめながら今の質問を繰り返し頭で咀嚼して——理解できたとき、何かを見透かされたように恥ずかしくて目を逸らす。無意識に口元を手で覆っていた。

33：回顧

顔が熱くなる自覚があった。ええと、彼女はなんて言った？ 身体の方に興味が、だなんて——俺はそう思われても仕方のないことを……した、のか？

答えなければ、という思いで「あの……」と切りだしたものの、続かない。何を言えいいんだ、俺ってやつはほんとうにもう——

「あの俺、そういう男に見られてた……？」

恥ずかしさと自己嫌悪で俺は完全に片手で顔を覆って、呟くように言った。

「そういう男？」

彼女が繰り返す自分の台詞に、俺は自分をぶん殴ってやりたいくらい情けない思いで顔を隠していたけれど——説明すべきことはしなくてはと思い直して顔をあげる。

彼女は、俺を見ていた。質問の裏に何か思うところがあるようなそんな口調ではなく、単なる質問なのだろう、とその表情で理解した。

それなら——俺もまっすぐ伝えれば、いい。

「あんたを守りたかったから。——それだと、答えにならないか？」

「私を、守りたかった」

彼女の口から繰り返される自分の台詞は陳腐だ。情けない思いで口の中に溜まった唾を飲み込むと、俺は頷いて、そして戸惑いながら言葉を探しつつ、続ける。

「抱きしめることであんたを守れるかどうかはわからないけど、ただ、俺があんたを守りたいと思ってるってことを、示したかった。

——でもそれ、言葉で言えば良かった。いきなり抱きしめたりとか

は……失礼だよな。ごめん」

言葉にするうちに落ち着いてきた俺は、言い終えてもう一度頭を下げた。ごめん。本当にごめん。謝罪の気持ちに彼女に伝わればいい。そしてもし出来るのなら俺が彼女を守りたかったことを正確に受け止めてくれれば——俺としては御の字だ。

そつと頭をあげると、彼女は表情を変えずに俺に向かって手を伸ばす。

え、と何かを予想する前に、彼女の両手が俺の首に巻きついた。巻きついて肘を曲げれば……彼女の身体が俺にぴたりと吸いつくように、寄り添う。

その状況を理解するのに俺はたつぷり一分はかかったと思う。彼女が俺を抱きしめている——ああ、さっき、俺は言っただ、あんたを守りたい、つて。それを示すために抱きしめた、つて。

彼女の気持ちは俺にストレートに伝わってくる。それはつまり……彼女が、守りたいと思ってくれていること。

耳元に彼女の吐息が触れる。俺の感覚が耳に集中したその時——彼女が呟いた。小さな声だったけれど、俺の耳は確かに聞いた。

「私——嫌じゃなかった」

34：涙粒

聞き違い……じゃない。嫌じゃなかった、と彼女は言った。俺はそう認識すると彼女の背中にそつと腕を回す。

いいのか？ 抱きしめちまって——いいのか？

「……本当に？」

我ながら馬鹿な質問だった。しかも声は震えていた。俺が何を恐れているのか、彼女には伝わっているだろう。俺の腕の中で小さく頷いた彼女の答えに、胸の奥がつんと痛んだ。

その痛みは——何を意味するのか、俺はわかる。言葉で説明は出来ないけれど、きつと彼女もわかつてくれる。こみ上げる痛みと一緒に、彼女の背にまわした腕に力を込めた。

「本当に……？」

まるで夢みたいだと自問自答していた俺の問いはつい言葉に出てしまっていたらしい。零れた声を彼女は受け止め、今度はさっきより強く、頷いた。

現実感と幸福感がわきあがって、俺は彼女を抱きしめた。きちんと両腕に力を込めて、彼女を腕いっぱいと感じられるよう抱きしめた。温かい体温が、心臓の鼓動が、伝わってくる。

ひとときの激情がゆっくりと静まり始めて、俺は腕の力を緩める。しかし離すまいと彼女の両腕をそつと掴んで、ゆっくりと彼女の顔を覗き込んだ。

喉のところまで何かがびつしりと詰まったような感じがして、なかなか声が出なかった。それでも俺は言葉を、声を何とか捕まえる。

「俺——あんたのこと」

「待つて」

彼女が俺の言葉を押し留め、俺を見上げる。俺は真っすぐに彼女を見つめた。

たとえば以前彼女を抱きしめたときに感じた欲情は——今俺の中にはなかった。それよりも彼女がここにいることの方が今の俺には大事だったからだ。そしてこの気持ちを言葉にすることが。彼女に伝えることが、大事だった。

彼女は俺をじっと見つめた後ゆっくりと自分の右手で左胸——心を指し、そしてその手を俺の心にそっと重ねた。その仕草で、彼女の言いたいことは伝わってくる。

「わかってる」

「……うん」

俺は真面目に頷いた。言葉で共有しなくてもわかることがあるという事実を、俺も彼女も痛いくらいにわかっていた。たぶん、感じ合うことの方がより正確に感情を伝えることが出来るだろう。

気持ちを言葉へ変換するとき微妙にずれが生じ、相手に伝わった言葉の印象がそこでまたずれを生じ、そして相手が言葉から感情に置き換えるときに差異が出る。——それは仕方のないことだ。

35：祝福

「けどさ」

俺は微笑を浮かべ、腕の力を緩める。手を離しても、彼女は離れて行かないだろうこと——それを感じて、笑みを浮かべたままで続けた。

「一度だけ、言葉にしてみたい」

彼女の頬に触れる。最初はそっと、まるで羽根が触れるように僅かに。そして頬を包み込む。そっと頷いて了承の意を示してくれた彼女に、俺はこみ上げる思いをすべて、言葉に変えた。

「——あんたのこと、好きだ」

彼女はそれを聞くと目を閉じた。口元が笑みの形に動く。俺の思いが言葉を通じて正確に彼女に伝わったことが、わかる。

俺と同じように穏やかな微笑を浮かべる彼女の瞳から、一粒、温かい涙が零れた。それが哀しみの涙ではないことは、わかっていた。

「好きだ」

無意識に俺はもう一度繰り返していた。伝えようと思う前に溢れていってしまう——ダメだ、ちゃんとブレーキかけておかないと。

彼女は眼を開けて俺を見上げると、僅かに笑みを浮かべる。それが了承のしるしだと心に直接伝わって、俺は思わずこみ上げてくるあったかい何かを我慢できずに、笑う。

「なあに」

「いや」

彼女は不思議そうに笑みの意味を訊ねるが、俺は首を振って誤魔化そうとした。……勿論、彼女がそのままスルーしてくれるわけもなく、黒い瞳がじつと見上げて来ている。

仕方ない、と俺は小さく幾度か頷いた。

「幸せだ、と思ったの。俺、幸せだって今、実感した」

正直、そんなこと言うのは恥ずかしかった。けれどここまで来たらしょうがない。俺はそう答えるなり彼女を抱きしめる。

「ちょ……」

「ありがとう」

耳元で、彼女に告げる。ありがとう。何についてなのかなんて、それは言う必要なんかない。抱きしめていた彼女の腕が俺の背中に回って、細い腕が俺を抱きしめる。そして彼女の声が紡がれる。俺の思いと同じ、言葉を。

「ありがとう」

35：祝福（後書き）

無事、完結いたしました。

読了いただいた皆さま、ありがとうございました。

既にお気づきの方が多いとは思いますが、当作は「桜色の闇」という別作品と表裏一体となっております。「桜色の闇」は乃里子視点でのお話となりますので、ご興味がありましたらそちらも合わせてお楽しみください。

高瀬はいわゆる標準的な大学生で、特に目的や夢があるわけでもなく、なんとなく流れて生きているような普通の青年です。この辺りが乃里子とは対極にあり、高瀬自身、それが問題なのかどうかという点に気づいてはいないのだと思います。

高瀬が乃里子の心と呼応した部分については特に二人の間に似通った性質があるわけではなく、単に高瀬はちょっと人よりも感受性が強いせいであると思われます。

桜の花に対して抱く感情という点で乃里子の心と呼応した高瀬は、自分が何となくしか感じていない思いをさらりと言葉に出来る乃里子に自分にはない部分を見出して惹かれたのと、そして自分がその心を理解ではなく感じ合えることに初めて気づいたのかもしれない。

どちらかといえば優柔不断で流され易いタイプでしたが、揺れながらも自分の気持ちと対峙できる強さを引き出した高瀬は、おそらくすべてを無意識でやっているだろうというところが怖いですね。

保科の扱いについては可哀想なことをしたと思っています。ハッピーエンドなお話を書いてあげたいなと思いつつ、またその場で皆様にお会いできますことを祈りつつ。

香住

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0995h/>

闇夜の桜

2010年10月20日19時44分発行